

ニュース

ダーク・ツーリズムの意義、米教授説く 京都で講演

悲惨な歴史の舞台になった場所を訪れる「ダーク・ツーリズム」を考える講演会が16日、京都市右京区の京都学園大で開かれた。日本近現代史や日本労働史を専門にする米ハーバード大のアンドルー・ゴードン教授が登壇し、「困難な歴史」とも呼ばれる遺産をさまざまな視点で解説する重要性を説いた。

ゴードン教授は、「明治日本の産業革命遺産」が世界文化遺産に登録された際、戦時中に朝鮮半島出身者が徴用された問題を巡って日韓両政府の間で起きた議論を取り上げた。「（明治期が登録対象で徴用工問題の時期と重ならないとした）日本側の主張は、時代と時代の間壁をつくる点でおかしい上、『明るい明治』『暗い昭和』という分け方が単純すぎる。明治期に『軍艦島』などで日本人が体験した暗い歴史が無視されている」と述べた。

ダーク・ツーリズムでは、同じ時期に存在する明と暗の両側面の関連性を紹介し、さまざまな解釈を可能にすることが大切だと指摘した。成功例として、北海道の網走監獄や栃木県の足尾銅山を挙げた。



ダーク・ツーリズムをテーマに講演するゴードン教授（京都市右京区・京都学園大）

【2018年06月17日 11時06分】

Copyright (c) 1996-2018 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd. All rights reserved.

各ページの記事・写真は転用を禁じます。著作権は京都新聞社ならびに一部共同通信社に帰属します

[ネットワーク上の著作権について](#) [新聞・通信社が発信する情報をご利用の皆様](#)に(日本新聞協会)
[電子メディアおよび関連事業における個人情報の取り扱いについて](#)